大寄おおより小寄こより

真宗大谷派（東本願寺）
小松教務所
〒923-0904
小松市小馬出町２６
Tel 0761-22-0555
発行者 池守 章
編集 小松教区教化委員会

お同行（どうぎょう）さん

～あなたの隣の門徒さん～

小松市埴田町 石田良弘さん（80）

上写真：石田さんとイブキ杉

徳橋組のお講のお世話をしている石田良弘さんにお話を伺った。

石田さんは、埴田町の徳橋神社の近くに生まれ育った。子どものころ、毎年春になると、千代町に住むおばあちゃんから、「今年も能美の蓮如さんのお参りにおいでや」とお誘いがあり、田畑が忙しい両親に代わって兄弟で野菜を土産に持って、能美町の正賢寺の蓮如上人御忌をお参りした。当時、御忌が勤められる日は、お寺の境内に露店などがたくさん立ち並び、参詣者で大変賑わっていた。

石田さんの心の中に、境内の露店やおばあちゃんの家で美味しい手料理を食べたことが、子どもの時の楽しい思い出として残っている。しかし、正賢寺は無くなって、今はコンビニエンスストアが建っている。その片隅には、「蓮如上人御手植杉」と刻まれた石柱とそのイブキ杉がある。

石田さんは、大学卒業後、就職のため地元を離れた。子どもたちが成人し独立したのを機に退職して埴田町に帰って来た。そして近年、町内のお講やお手次寺のお世話を始めた。

先日、石田さんが、旧知である私の亡き父のことを尋ねるためにお寺へ来てくれた。その際、「長年の不義理を思い涙した」という。石田さんは「長い都会生活で他宗教から誘われることがあったが、ぶれることはなかった。おばあちゃんは、私を導いてくれた一人だと思っています」と話してくれた。

現在、とても熱心にお講のお世話やお手次寺のお世話に取り組まれている。おばあちゃんへの追慕の念が石田さんを仏法聴聞へと導いているのだろう。

広報委員・廣島伸治

常磐会館報恩講（ときわかいかんほうおんこう）

9月30日(月)15:30～御伝鈔拝読

10月1日(火)9:30～法要

講師 沙加戸（さかど） 弘（ひろむ）氏（大谷大学名誉教授）

対談 相続講

小松教区門徒会長　西田 保氏
前十二日講門徒会長　中田 郁夫氏
真宗大谷派参議会議長　能邨 勇樹氏
小松教区会議長

小松教区では、門徒会が主体となって受け継いできた相続講。その重責を担ってきた方々にお話を伺いました。今号から3回にわたって掲載します。

日野　これまで西田さんと中田さんは相続講には、門徒会の世話方であったり、門徒会の会長など長年大変ご尽力をいただいてきたわけですけど、振り返ってどのように感じられていますでしょうか。

西田　寺離れ、宗教離れが叫ばれる中、私が相続講の世話方を始めて15年ほど経つわけですが、私の集落では当初は特定の家から相続講金を目標額になるまで集めるという形でした。ところが「私の所へ何も集めに来ない」という声を聞き、それから真宗門徒の家のすべてから集めるようになりました。そのように始めたころは、目標額の2倍集まりました。5年ほど前から、世代や意識が変わり、同じように集めに回ると「相続講ってなんや？」とか「もう年寄りがいなくなったから、納めない」ということが出てきました。これはよわったことやなあ、と。

3年前、集落の「おやじぼんこ（報恩講）」の席で、事情を説明したところ、以後全部の門徒さんの家から年間同一金額を集めるということになりました。

このように年月とともに、若い世代の認識も変わってきましたし、時代に相応した相続講金の集め方を工夫しなければならない、というのが私の率直な思いです。

日野　中田さんにもお伺いします。

中田　相続講金を集めるということに関しては、教区内のどこもスムーズにできるところはないだろうと思います。

それとは別に、ほかの教区の方とお付き合いさせてもらって分かったことですが、その方々は相続講ということの中身を知らない。それと、法義相続、本廟護持という言葉を知らない人がいるということです。私は若い時から、法義相続、本廟護持が真宗門徒にとっての中心であり、行動をともなうべきことと考えていました。

しかし、最近の教区内を見ていますと、他教区と同じように理解されないようになってきたように思います。だいたい、組の御講の参詣者がだんだん減ってきている。それと、最近の人は講師を選ぶんです。講師によってお参りに来たり、来なかったり。昔の先輩方はそんな聞き方をしたんですかね。たのしい、面白いお話を聞きたいという気持ちはわかるんですが、それは自分の思いに叶うかどうかということじゃないんでしょうか。

私も相続講のお世話にかかわって15年ほどになりますが、その中でいちばんよかったことは、「すごい先輩がおるなあ」と思えたことです。

西田さんもわかると思うけど、今と比べて当時の世話方の迫力が違うと思わんけ。

西田　そうや。

日野　質ですか。

中田　質、迫力が違う。北板津組にしても、九日講、徳橋組にしても、力の入れ方が違いましたよ。一生懸命やもんね。

その具体例が、今から13年ほど前、これまでも十二日講はあったんですが、参加者が次第に少なくなってきていたんです。これではいかん、と言って、今の十二日講門徒会の組織を作るために、8組の各会長さんが自主的に近くの喫茶店に38回か39回も集まって相談をされた。当時は私がいちばん若くて、ほかは年長の方々ばかりでしたが、馬力がありましたよ。今見ているとそんな迫力はないね。

門徒会長：西田氏

それはどういうことかというと、一般的に宗教離れとか、過疎化、少子高齢化というようなうまい言葉があるので、それを使って宗教に力を入れない言い訳にしている。私はそう思っています。過疎化や高齢化は真宗大谷派だけじゃないです、日本中です。そのことを使って、宗教離れや相続講金の減少の理由に使ったらいかんのじゃないかと、私は思います。

15年前、そんな先輩方に出会えたことがありがたいと思っていますが、私自身あんな風にはなれない。

日野　そのお二人のお話を受けて、能邨さんにもお話を伺いたいと思います。

能邨　私は平成2年、結婚をしまして勝光寺へ入寺しました。小松教区へ来て、はじめにいちばんびっくりしたのは、主体的にかかわる門徒さんの姿です。私は三重県の出身ですが、だいたい三重をはじめ他の教区では、門徒さんはお寺のお手伝いをしてくださる、という役割です。例えば、同朋会であったり、お寺の行事の裏方のお手伝いですね。それが、ここへ来たら自分たちで、主体的に講師を選び、場所、日時を決め、お参りにはちゃんと肩衣を掛け、最前列でかぶりつくようにお話を聞いている。それを見たときには、衝撃を受けました。なんでこんな人たちがいるんだろうか。真宗王国とは聞いていましたが、それは真宗が盛んだな、ぐらいに受け止めていました。そうじゃなくて、門徒さんたちが主体的に受け止めて、創造し行動している姿がここにありました。すごいな、と純粋に思いました。

こういう人たちが、どうして生まれてきたのかを考えたとき、相続講がバックボーンにあった。最初は仕方なくではあったかもしれません。また、地域の地縁とか血縁がきっかけなのかもしれませんが、しかしこのことを通して、聴聞の場に出て、目覚めて、感動して、やっていかなければならないと気づいていかれたんだと思います。

ですから、私がそういう方々とお会いして、ある意味僧侶よりも仏法を語り、本山をあるいは地域を心配しておられた姿に感動したことを今でも覚えています。

三重にいたころ、訓覇信雄氏が門徒さんに対して、「僧侶は、守らにゃならん寺があるからどうしても保守的になる。現代社会に親鸞聖人のお念仏を伝え、開かれた宗門にするには、あんたらだけが頼りや」と深々と頭を下げておっしゃっていた。まだ若くて、よく意味が分からなかったけれど、ここへ来て、小松や大聖寺の方々のように、主体的に場を開き、お念仏をする人たちの集まっている宗門をイメージされていたのだと思いました。

先ほど、西田さんや中田さんが昔の人はすごい、と言ってましたけど、私にしたらこのお二人も大変すごいわけなんですけど、それでお参りに来ないのを時代のせいにしてしまって、例えば経済的に豊かになってしまったとか、社会生活がバラバラになってしまったからだとか、周りや時代のせいにしがちでしたね。でもそうではないんじゃないか。あなた方は本気で真宗を伝えようとしてきたのかと、お二人が教えてくださっている気がします。やはり相続講を通してお育てされた方々というのは、厳しいというか、おっしゃることが違うなあと。ですから、日頃感じているのは、その願いになんとか寺方もお応えしていかなければならないということです。

日野　どうもありがとうございました。すごい先輩を見てきた三人のお話を聞いて、若い私たちはこれからどのようにすればいいのか、ということを改めて思いました。

次号へつづく

写真左から
能邨氏・中田氏・西田氏・日野

【教区教化事業のご案内】

◇十二日講
毎月12日午前9時半～
【9月】芳原里詩氏
加賀市 妙徳寺
【10月】滋野井光氏
能美市 称佛寺
【11月】白城寿一氏
能美市 静照寺
【12月】林 拡氏
能美市 誓立寺
会場 常磐会館（小松教務所）

◇日曜講座
【10月】20日、27日
【11月】3日、10日、17日
【12月】1日、8日、15日、22日

◇常磐会館報恩講
10月1日(火)午前9時半～
講師 沙加戸 弘氏
（大谷大学名誉教授）
会場 常磐会館（小松教務所）

◇御正忌報恩講団体参拝
11月27日(水)日帰り
御斎と結願逮夜参拝
受付は教務所まで

◇詳細につきましては小松教務所までお問い合わせ下さい

うららのお寺

長圓寺（ちょうえんじ）

～小松市上本折町～

「蓮如上人御旧跡」と「東照山長圓寺」の石柱が立つ門から境内に入ると、蓮如上人の銅像が迎えてくれる。この銅像は昭和51年に責任役員をされていた瀧外次さんから寄進された。

1449年の冬、天台宗の寺院であった長圓寺に蓮如上人がひと月ほどご逗留されたことをきっかけに、浄土真宗に改宗した。蓮如上人の弟子となったのは賢覚・了珍という住職兄弟だった。了珍は数十年に渡り蓮如上人の側に仕え、共に仏法聴聞に励んだことが、長圓寺に伝わる縁起に記されている。

そういったご縁から、長圓寺には上人直筆の「六字名号」や御遺骨等の寺宝が現存している。中でも大切な宝物が蓮如上人54歳のときの御影で、賢覚が上人より直々に頂戴したものだ。毎年4月24日から26日には蓮如上人御忌が勤まり、寺宝はこの期間中のみ公開されている。

毎年10月23日から25日まで厳修される報恩講では、御門徒と有縁の方々にお手伝いただき、手作りのお斎が出されている。昼の御法話の終わりごろには、天ぷらを揚げるいい匂いが漂う。料理教室で鍛えた皆さんが腕を振るうお斎は大変好評とのこと。住職の松永淳さんは「お参りしてくれた全ての方に美味しいお斎を召し上がっていただきたい。そして一緒に食事をとり交流する中で、聴聞されたお話を確認し合って頂きたい」と語られた。

真宗Q&A

Q 阿弥陀如来は本当におられるのですか？

A 阿弥陀如来は、そのおはたらきを通して出遇う如来です。

弥陀成仏のこのかたは
いまに十劫を（たまえり）
法身の光輪きわもなく
世の盲冥をてらすなり

これは『正信偈』のお勤めをしてから最初に出てくる『御和讃』です。まず、阿弥陀如来はそのお身体から光を放たれて、私たちを照らして下さっていると詠われています。私たちにしてみれば、照らし出されたとき初めて、自分自身の生きている相（すがた）が教えられることになります。それが「盲冥」なる者という自覚です。本当に大事なことを見失い、冥（くら）い中を生きてきていたのが自分だったということに気づかされます。煩悩まみれの身にすら際（きわ）も無く届く、不可思議なはたらきです。またそのはたらきには、いつの時代を生きる人でも出遇うことができます。

阿弥陀如来が量り知れない長さ（十劫）のいのちを生きておられるというのは、今の時代を生きる私たちも出遇うことができるということを表しています。

日々の生活の中で、様々な出来事から私自身の生きるすがた、いのちのあるがままが教えられてきます。そのようなはたらきの根源にあるのが阿弥陀如来の本願です。「世の盲冥」の自覚をいただいたならば、たしかに阿弥陀如来がおられると言ってよいのではないでしょうか。

教学研究室『郡中学舎』研究員
滋野井 光